

## ● コメント1 塩原 良和 ●

与えられた時間が5分ですので、頑張ってコメントしたいと思います。

白石さんの冒頭の【提題2】では、グローバリゼーションにおける流動性の高まりと人々の出会いの増大という問題提起がなされていたと思います。流動性の増大とは平たく言えば、越境する情報や文化、そしてそれらを伴ってわれわれの眼前に現れる他者との遭遇の増加と言いかえられるでしょう。この提題2は、他者との出会いに伴う自己の変容をどう読み解くべきかという問いも意味しています。

この「自己」は、安達さんの報告にあったとおり、まさに再帰的な自己でもありえます。それは、絶えざるつくりかえとアイデンティフィケーションに特徴づけられた、アンソニー・エリオットの言う「新しい個人主義」、インスタントでプラスチックな自己です。そうした自己のあり方を前提としたとき、外国人に代表されるような越境者と、定住者、すなわちホスト社会の住民の関係をどうとらえるべきかということ、これを安達さんは報告されました。そして稲津さんは「われわれ」から見ることのできる「かれら」という単純な図式ではこの関係をとらえることができないという重要な問題提起をしてくださったわけです。

他者との出会いとかかわりは、定義上まさに自己の変容そのものを含みます。それこそがグローバル化における自己と他者の関係を読み解く際の重要なポイントです。他者とかかわりということは、自己が変わるということと表裏一体である。ということは、他者とかかわりをコントロールする能力とは、とりもなおさず自分自身と自分の生きる人生をコントロールする能力にほかならないということです。これを「自己のガナビリティ」とでも呼んでみましょう。そうすると、グローバリゼーションというのは、その人の社会的なポジションに応じ

た自己のガナビリティの大きさの違いとして、個人レベルでは経験され得ることがわかってきます。

その際、象徴的、物理的な意味での「移動」という経験の持つ意味にも注目しなければなりません。山北さんの報告で「負の移動」という言い方がされています。負の移動があるということは、正の移動があるということです。正の移動、すなわち社会的上昇移動とは、動くことのできるパワーを持つという感覚、あるいは少なくとも動くための潜在能力をもっている感覚として経験されます。下に動こうとする人はいませんので、上に動こうとすることのできるパワー・潜在能力として。それに対して負の移動というのは、それらの欠如の結果、下方に「流される」感覚として経験されるわけです。



塩原 良和

ここで重要なのは、移動するパワー／潜在能力が無限大に近いところと、それがゼロに近いところでは、「越境者」と「定住者」の区別そのものが意味を失うことです。パワーが無限大に近いところにいる人々、つまり常に動くことのできる人々というのは、どこに住んでいようが、どんな人であろうが、常に越境者でありうる。だから越境者と定住者の区別はここでは意味をなしません。そこには、コスモポリタン・エリートの「フラットな世界」というリアリティが成立しています。

それに対して、移動するパワー／潜在能力がゼロに近いところ、アンダークラスとかサブカルタンとか言われている人々が打ち捨てられ、押し込められている場所でも、やはり越境者と定住者の区別は意味をなしません。なぜならば、例えて言うならば、外国人だろうが日系人だろうが日本人だろうが、派遣労働者であれば派遣切りに遭うからです。すなわち、バウマンのいう「人間廃棄物」を生み出す力は、越境者と定住者の区別なく人を社会的に排除していくのです。

したがって、越境者と定住者の区別が意味をなすのは、「フラットな世界」と「人間廃棄物」の場の中間領域にいる人々なのです。ここにはパラノイアを抱いているミドルクラスとか、ルサンチマンを抱くロウワークラスだとか、いろんな人びとがいます。轡田さんの報告で取り上げられていた「ローカルな人々」もこの住人ででしょう。こうした人たちの行為や感情を大きく規定しているのは、下方一方通行の「流される」経験のもたらす不安であり、自分たちの本来もつべきものをもてないという感覚からくる怨念です。

報告ではこうしたグローバルなリアリティを分析するための方法論についての重要な問題提起もありました。リチャード・フロリダはわれわれ研究者を「スーパークリエイティブコア」、つまりコスモポリタン・エリートと定義しています。それは部分的には正しいと思いますが、スーパークリエイティブコアというポジションからみえるリアリティにとどまり続けるのでは、先ほどいった中間領域、グローバル化の「荒野」で翻弄される人々にとっての「出会い」の意味を分析することはできないのではないのでしょうか。稲津さんが言っていたことを、私は次のように解釈します。研究者は、出会いの当事者としての自分自身に注目すべきである。研究者自身が「荒野」に巻き込まれている状況を自覚し、そこで起きているリアリ

ティを探求してみるべきである。そういうアプローチを稲津さんは提案していたのではないのでしょうか。それは、テッサ・モーリス＝スズキさんが最近提唱している、地域研究における「流れ」と「渦」という概念を想起させます。

こういったアプローチ・方法論というのは、非常に豊かな実践的可能性も秘めています。オーストラリアのある研究者が「日常的コスモポリタニズム」という概念を提唱していますが、それは荒野に住む人々の間のそれぞれの立場とか境界の違いを乗り越えた、コンフリクトをも含んだ日常的交渉です。コスモポリタン・エリートのフラットな世界とはまた違ったレベルでのコスモポリタリズムとして成立している、そういう日常的コスモポリタリズムの中に分け入って、その流れに乗って内在的に分析していく。そういうアプローチをしていくことで、研究者は荒野とフラットな世界という分断されたりアリティを生きる人々のあいだの橋渡し役になることもできるかもしれない。そこから、グローバリゼーションの時代における社会変革を構想するという社会学の現代的意義を見出すこともできるのではないか。そんなことを考えました。

## ● コメント2 五十嵐 泰正 ●

五十嵐です。僕の守備範囲にある三つ四つの発表を強引につなげていこうとすると、やっぱりややコンベンショナルな議論にならざるを得ないので、ちょっと退屈かもしれませんが、全体を整理するというこで聞いていただければと思います。

コンテンツのことを議論した谷村さんの報告では、可視化ということが一つ重要なポイントになったかと思いますので、そのお話から入ろうと思います。

地域イメージを形成するというのは、まさに

可視化、何らかの固有性を見えるようにしていくということとして、それは端的に言うとは差異から生まれてくるわけですね。その差異というのが、だれから見てもポジティブなものというのはある意味もうやり尽くされていて、近年ではどこかでネガティブなもの、あるいはコンフリクトをはらむものを掘り上げて可視化していくということが、国内外の地域イメージ戦略の中で試みられるようになってきています。

これは、いわゆるオタクカルチャーみたいなものもそうでしょうし、あるいは稲津さんが指摘した、行政的な意味でのエスニックと書いていたようなものもそれに近くなると思うんですが、こうした差異を取り入れた戦略が採用されていく場合には、差異性や他者性に向き合う基準が変わることになります。いわゆる主流のカルチャーからどの程度外れてるかどうかという基準があまり意味を持たなくなって、その差異が生産性を持つか、その差異が集客力を持つかというところで、差異が値踏みされてゆくようになるのです。

すなわち、「主流文化」から見てどんなに異質性が高く、眉をしかめるようなものであったとしても、生産性を持つもの、集客力があるものというのが演出されて外部に向けて積極的に「見せ」られていき、その代わりに、生産性がなく見せる必要がないものはなかつとことにされ、結果的に隠蔽されていくと。そういう、ある種の生産性や集客力を軸にした文化の選別みたいなことが頻繁に起こっていきます。そういう形での地域での文化の再編の典型的な事象の一つが、谷村さんがコンテンツツーリズムとおっしゃった、オタクのいわゆる「聖地巡礼」をめぐる動きだと思えるんですね。

そうすると当然、こうした動きに乗れる人と乗れない人という問題が出てきます。それによって経済的な利得を受ける住民層とそうでない住民層ということともかなり重なってくるとは思うんですけども。あるいは稲津さんの問題

に引きつけて考えれば、この選別の過程で、カテゴリーカルには見せられないがゆえに演出もしくい多文化性みたいなものは、どうしても疎外されていく。稲津さんの問題提起は、その選別過程に研究者も加担しているんじゃないかという、重要なものでした。

ここで、フィル・コーエンというイギリスの社会学者が、ごく当たり前なんですけどとても重要なことを言ってるのを紹介したいと思います。まずこの現代においては、差異は資源である、と。例えばちょっと尖ったユース・カルチャーであるとか、セクシュアル・マイノリティーとかエスニック・マイノリティーの文化というのが、どんどん資源として見なされ、困り込まれてゆく。しかしコーエンはそこで、階級的な差異は資源にならない、ということを使うんですよ。

ただこれはイギリス的な文脈だと、ちょっと微妙なんです。カテゴリーカルにある地域に顕在化するワーキングクラス・カルチャーを想定したとすると、もしかしたらその部分に関しては、「階級」が資源になる可能性がある。例えばロンドンのイーストエンドは、コックニー訃りの古き良きワーキングクラスが住むエリアと情緒的にイメージされがちですが、港湾労働者が好むゲテモノの代表として蔑まれたウナギ・シチューの店も、ベッカムがテイクアウトするなんてメディアで紹介されて、今ではちょっとした観光名所になってたりします。これと似たような現象は、日本のいわゆるB級グルメにもよく見られますよね。

けれども、そうしたカテゴリーカルな固有性に結び付けられない「単なる」貧困というのは、これは確実に地域資源にはなり得ません。そこで言うと、山北さんの扱っていたホームレスの問題、野宿者の問題というのがまさにそこに入ってくるだろうと思うんですね。つまり先ほど言った、見てほしいもの、生産性のあるものは演出して資源とする、そうでないものは隠蔽

する、この二分法からすると、その見せたくないがゆえに隠蔽される側のことを扱っていたのが山北さんということになるかと思います。

そこで考えたいのは、山北さんが最初に見せてくださった1分間の映像ですよね。ちょっと時間をぜいたくに使っていたいただいたこの1分間の映像に関して、「不分明」と表現されていたかと思うんですけども、ああいう通行量の多い路傍の野宿者という存在は、地域資源として囲い込むことができない貧困の存在を、通行人に「暴力的」に見せてしまうということでもあると思うんですよね。こうした異質性が露出した空間を、コンタクトゾーンみたいな言い方をする人もいるでしょうし、いろんな言い方があり得ると思うんですけども、そういった普段は隠蔽されていくものというのをふと「暴力的」に露わにしている空間の意味、その現代的な意義というのを、もう少し山北さんにお聞きしたいなと思いました。その「不分明」というものの内実、ということですね。



五十嵐 泰正

さて、今までお話ししてきた議論というのは、現在の都市社会学の中では、ある程度定番のものになっているかもしれません。地域イメージ戦略みたいなものの中に内在する、排除性、選別性を見ていくということは。

ただ、ここでもう一回り、議論を転回して考えなければいけないと思います。そこでポイン

トになるのが、轡田さんの報告になると思います。これは、いわゆる地元志向の若い人に対する排除論と包摂論を乗り越えようとするというような、すごく興味深い整理でした。そこで口頭ではなかったかもしれないですが、レジюмеの中にあつたことにちょっと注目させていただきたいんですけども、調査した地方私大卒の若者たちの年収の中央値が250万円という話があるんですよね。これがどれほどの経済学的な意味を持っているのかということ、僕は今、論じる準備はありませんが、でもこの250万円というのが微妙な、しかもかなりリアリティーを持った数字だろうなというのは、直感的には理解できるわけです。つまり、この轡田さんが言う排除論と包摂論のはざまにあるようなリアリティーというのは、この年収250万円というところから生み出されているものなんじゃないだろうか。これはすごく強調しなきゃいけない部分だと思うんですね。

それは逆に言うと、地域イメージ形成とか観光化とかいうときに、先ほど申し上げたような文化の選別や排除が必然的に起こるじゃないかとか、いろんな弊害があるわけですが、そんな悠長なことを言ってる場合かという当然出てくる反論にもつながってくるんですね。

端的に言うと、このご時世に若年労働者のボリュームゾーンが年収250万円という、特に地方ではそう簡単ではないラインを維持できる程度の活性化といいますか、活性化というのは非常にマジックワードではありますが、そのラインの雇用を守っていかなければという視点からすると、排除だ選別だ、なんていうことを言ってる場合じゃないじゃないかという反論も十分あり得る。つまり、生存に足る雇用を生み出し、サステイナブルに地域経済を回していくためのライン、その地域に定着可能性というものを最低限確保するための地域活性化のラインには、都市間競争の激化という環境を考えたときに、いわゆる地域イメージ戦略みたいなものを

どの程度伴わなければいけないのか。恐らくこういった議論というのは、今後、地域社会学や都市社会学系でも無視できなくなってくるんじゃないかと考えます。

ただ、たとえばコンテンツツーリズムで、250万円の雇用がある程度のボリュームで生み出す活性化を目指せるかという、これはまず難しいだろうと思うんですね。

これに関連して、九州のいろんな観光地を分析した須藤廣先生が興味深いことをおっしゃってるんですが、観光というのは、必ずしも雇用創出力であるとか、よく期待されるところの地域活性化力みたいなものは、実は大して高くはないと。だけれども、その割にはさまざまな自治体で極めて積極的に推進され、広範な支持を得る傾向がある。それはなぜかという、観光はアイデンティティー・ポリティクスにかかわるからということをおっしゃってるんですね。

これを僕流に翻案して端的に言うと、観光がどれだけお金を生むか生まないかということ以前に、外から来た他者に自分の住んでる街がいいねと思われ、話題にされていくこと、すなわち外部から承認を供給されることというのが極めて重要なポイントなのではないかと。谷村さんが言うコンテンツツーリズムの振興に必ずしも乗れていない人であっても、活性化の恩恵にあずかってない人であっても、外部から我が街に承認が供給されるということ自体は、素直に嬉しいものなんだということがあると思うんですね。ここをまた轡田さんの話に接続していくと、いわゆる定着志向であるとか地域活動志向、これはどちらかという、包摂論的なポジティブなほうの地元志向となると思うんですが、そういったものをブーストする初発の起動力になるのも、多くの場合恐らく外部からの承認の供給だろうという、多分そういう側面は否定できないと思うんですね。

そんなわけで、ポジティブな地元志向を生み出すためにも外部からの承認の供給が必要とな

れば、そのためにはある程度わかりやすい地域イメージというのが必要になってくる。これを全否定することは当然できないわけで、そうするとむしろよりマシな差異性・他者性の商品化、マシな可視化をするために、稲津さん、山北さん、それから谷村さんの問題意識というのが、地域イメージ形成や観光化の現場にいまどう介入していけるのかというふうに、展開していく必要があるのではないかと、その展望というのを見せていただきたいなと感じました。

以上です。

## ● リプライ1 山北 輝裕 ●

まず少し映像について補足させてください。これは河川敷なんですけども、よく見る風景だと思うんですけど、釣りをしている人だとか、これは高架下でマージャンをしていたりしているんですね。これはもう一体どこの野宿の人がやってるのか、地域の人がやってるのか、もう何だかよくわかんないですね。あるいは、野宿の人たちの小屋があったり、こういうのはほとんど意味がわからないんですけど、車がなぜか置いてあって、もうよくわかんないんですね。

さらに、これが定住層の人たちで、それからこれはだれが栽培してるんだろうというようなきれいな農場みたいなのが河川敷にあたりするんですね。ちょっと写真が見にくいですが、ごめんなさい。

それから、何かきれいな芝生だなと思ったら、ゴルフはやめてくださいとか、こういう看板が立ってたりするんですけども、最初、冒頭の映像で見せた映像をもう一度お見せしますと、某河川敷なんですけども、奥のほうで、ちょっとわかりにくいかもしれないんですけど、バーベキューをしているんですね。バーベキューをしている人たちがいて、手前に野宿の人の小屋があるわけです。



山北 輝裕

もう一つの映像は、2本目の映像も野球の練習をしているちびっ子たちがいて、奥のほうに野宿の人たちがいるという映像をお見せしたんですけども、映像ってやはり多義的な情報をはらんですんで、一義的にやっぱり解釈することがすごく難しいんですけども、僕なんかは逆に、意外に、これはうまく使っている、こんなにも使えてるじゃないかと言いたかったんですけど、それはやはり暴力的な光景でもあるわけです。つまりもっと言ってしまえば、やはりこの映像を見ると、出会いなんてやっぱりないんじゃないかと。つまり儀礼的無関心で、出会いってないんじゃないかという解釈もできると思うんですね。

僕は実験的に映像を使いましたけど、やはり今はもう野宿者の小屋はグーグルストリートビューで露骨に見えますし、世界じゅうの人が地球の上空から見えてしまうわけですね。

そういった静止画に対して、ちょっと動画で、そういうストーリーだけじゃないような、違うストーリーを何か動画で、社会学で何かできないかということを実験的に考えてまして流したという経緯なんです。

それで、五十嵐先生のおっしゃるとおり現代日本の都市の論理からして野宿者は隠蔽されるべき存在として位置づけられるわけですが、野宿者を暴力的じゃない形で、地域コンテンツのようにアピールするというのが、ちょっと僕も

それは今までにない発想で、今、直接何か答えることはなかなか難しいんですけども、やはり大阪の長居公園の事例でいけば、やはりいろんな人々ですね、若いフリーターであったり、野宿者以外の人たちであったり、地域の人たちが通うことで、そういった集える場としての可能性はあったと思うんですね。それほど力がつき始めていた地域だったということです。だから、市からしてみれば強制排除という手段に出ざるをえなかったということではないでしょうか。それを野宿者・支援者たちが意識してたかどうかかわからないんですけども、やはりポイントとしてはそういう集うということ、それこそが「売り」になるのかなと思います。

以上です。

## ● リプライ2 安達 智史 ●

報告の時間を勘案すれば、僕のリプライにはもっと時間を与えられるべきだと思いますけれど（笑）、時間がありませんので、なるべく端的に答えたいと思います。

塩原先生のコメントは、質問というよりはコメントという形なので、それに対して何を考えたのかということをお話します。塩原先生は、「出会い」そして「階層性」を問題にされていました。それと関連して、自分自身のアイデンティティをどうマネジメントできるかということが、ある種の階層性と関係するという問題があります。スーパーエグゼクティブ・コアからアンダークラスまで、あるいはいろいろな階層がその中間にあるわけで、それらがどのように人々の出会いに影響を与えるのかという点を私も関心をもっていました。そのことを考えるとき、やっぱり「出会い方」というのが非常に重要だなと思っています。マイノリティがその社会とどう関係を結んでいくのか、あるいはマイノリティとマジョリティとの関係をどう築

くのかというときに、その出会い方が重要になるわけです。

この問題を考えるとき、心理学の「接触仮説」を思い起こすことが大切です。接触仮説とは、人々の接触条件、つまり出会い方の環境と、集団間の偏見との関係をモデル化した古くからある心理学の理論のことです。積極的な関係条件、たとえば、平等で、個人的、相互的、依存的な関係において人々が出会うとき、互いの偏見は減少する、そのように考えられているわけです。

実は、その考え方は、イギリスの社会統合政策と密接に関係があります。2001年の北イングランドにおける暴動を契機として、“iCoCo”と呼ばれる、正式名称“*Institute of Community Cohesion* (コミュニティの結束研究所)”という組織が設立されました。僕も半年ぐらい客員研究員 (visiting scholar) として所属していましたが、その iCoCo に、テッド・カントルという一番偉い人、所長がいるんですけども、彼は2001年の暴動を考えるときに、原因は何だったのかということを理解するために、以下でも話しますように、アジア系住民と白人系住民との出会い方に問題があったととらえるわけです。また、それを克服するために、「コミュニティの結束 (community cohesion)」——その組織の名前でもありますが、——という考え方を提出するわけです。

当初、コミュニティの結束という発想は、新労働党が提起したブリティッシュネスという観念と親和性があり、共通の価値やアイデンティティに強調点が置かれていました。でも、だんだん論点がずれてきまして、つまり、課題がエスニック・マイノリティの社会への統合といった問題から、新たに次々とやってくる移民や難民の問題へと課題がちょっとシフトしていったわけです。つまり、そのような日常的なコスモポリタン状況が現れてくると、「イギリス社会にいるなら共通のアイデンティティや価値を持

つようにしましょう」とか上から言っている場合じゃなくなってくるわけです。むしろ、そのようなアイデンティティを、ローカルな人々の日常的な出会いのなかで下から見出していかなければならなくなってきたのです。そのときに、互いのグループが偏見を持って出会ってしまうと問題があるわけです。たとえば、剥奪された白人コミュニティは、「マイノリティ集団は国や地方から余分にお金をもらっているらしいぞ」とか、「移民はわれわれの税金を食いつぶしてるんだ」といったような考え——これは誤解なわけなんですけれども——を持つわけです。それは、それぞれの集団が、日常生活場面、たとえば職場や学校、コミュニティといった場所で出会う機会がないこと、——それは、「平行生活 (parallel lives)」と呼ばれるわけですが、そのような状態が原因となっている、そう考えられたわけです。平行生活のなか、異なったグループの若者が道端なんかで急に会ったりすると、罵りあったり、喧嘩したり、問題が起こるわけです。だから、ある種の出会いのあり方、集団間のコーディネートされた出会いを準備すること、そのような発想が、コミュニティの結束という考えにはあるわけです。

そのような出会い方という問題を考慮に入れ、インタビューをおこなった若者のムスリムがイギリス社会に対して折り合いをつけていたということを考えるとき、ひとつはやはり学校におけるコミュニケーションのあり方が重要であると思うわけです。私の調査地は、「超多様性 (super-diversity) 地域」と言われ、非常に多文化で、白人の方がマイノリティとなるような地域で、ムスリムなんかも多い場所なんですけども、そのような地域における学校では、多様性といったものについてどのように理解するのかということは重要な課題なんです。つまり、学校のガバナンスのためには、地域の多様性とか、イギリス社会の多様性といったことを

やっぱり議論しなければ、学校の秩序というものも成り立たないわけですね。あまりにもたくさんの方が集まりすぎて。ある中学校では、例えば1年に1度、1週間まるまる使って、「グローバル・シティズンシップ」というイベントをおこない、大学の留学生やボランティアなど外部の人を呼んだり、海外の同年代の子どもたちと交流したりして、社会の多様性を考えたりするわけです。そのなかには、イギリス人であること、つまりプリティシユネスが多様性とかどうかかわるのか、それがそれぞれのコミュニティやムスリムや宗教とどう関係づけられるのかといったことを、共に考える機会があるので



安達 智史

若者ムスリムとのインタビューの際、印象深かったことは、彼女／彼らは自分自身を非常に良くリプレゼン（represent）しているということ、つまり、自身のアイデンティティとイギリス社会との関係を理路整然と説明している点でした。彼女／彼らは、自身について語る／説明する準備ができていてくれるわけですね。ある意味で、そのように強いられているわけなんですけれど、つまり、ムスリムとしてのアイデンティ

ティとイギリス人としてのアイデンティティとの関係を最適化するようにマネジメントすることがある意味で強いられているとは言えるかもしれませんが、そういった関係づけを、つまり自分とは異なるエスニシティ、宗教を持っている人間とどのように折り合いをつけるのかといったことを、ある種、日常的な生活のなかで、彼女／彼らは学び、実践しているのです。

そのためには、やっぱりむき出しの出会いというのは危険なわけですね。ストリートでいきなり出会っちゃうとかですね。たとえば、公園には、移民とか「難民申請者（asylum seeker）」たちがたむろしています。彼女／彼らは居場所がないので、そのようなところで時間をつぶすわけです。それを、古くからの住民が見ると、「何だあいつらは」とか「怖いな」とかやっぱり思うわけです。でも、そのような不安が馴致された形で出会えれば、つまり積極的な接触条件を準備することによって、全然違う関係が築けるかもしれないのです。

一つだけ例を挙げますが、私がイギリスにいたとき、難民申請者、つまり難民申請をしてはいるがまだ認められていない無権利の人たち、何も権利もないがイギリスにいる人たちに、夜と朝の食事と寝る場所を供給している組織でボランティアをしていました。そこには、さまざまな国から来た人たちが15～20人近く集まっているわけですけど、そのなかは非常に殺伐としているわけですね。彼女／彼らは、どんなに寒くても昼間・日中は退出しなきゃいけないので、公園や図書館などで時間をつぶし、希望がないまま、夜、疲れ果てて施設に帰ってくるわけです。彼女／彼らは同じ境遇ですが、出身国もエスニシティも違うので、別に仲がいいわけでもない。だから、笑顔もなく、口論や暴力事件すら起こるほど施設内はすごく殺伐としているわけです。

ところで、私は別のコミュニティ団体で、こ



れもボランティアみたいなことを少しやってみました。その団体は地域の多様な人々を交流させ、一緒に何かイベントをやっていこうという、簡単に言えばそういう取り組みをおこなっている組織でした。そのなかに、難民申請している何人かの人たちも一緒に活動し始めたのです。一緒に、クリスマスや、イードを祝ったり、活動場所のマンションの植木を植え直すとか。そこで、白人の住民や、その他のエスニシティの人たちと交流するなかで、殺伐としていた難民申請者たちの態度が少しずつ変わるのを見ることができました。難民申請をしているある女性に対して、「この人こんなふうに見えるんだな」と強い印象を受けたのを覚えています。

つまり、そういったある種の出会いを、危険が取り除かれ、馴致された関係を供給することが大切なのだと思います。そのことは、塩原先生のおっしゃられた階層性の問題を乗り越えるために重要になってくるのではないかと感じています。スーパーエグゼクティブ・コアと呼ばれるエリートだけでなく、底辺やその中間にいるさまざまな人々が多様化する環境のなかでも、寛容な態度を持ち、なおかつ安定的なアイデンティティを保つためには、そういった出会いのあり方というものを考えていくことが大切なんじゃないかと思うわけです。

少し長くなりましたが、コメントに対するリプライにさせていただきます。

### ● リプライ3 稲津 秀樹 ●

まず、塩原先生、五十嵐先生、コメントありがとうございました。

今、安達さんがお隣でイギリスのエスニシティに関するお話をされていたので、それをヒントにさせていただきながら、お二人の先生方のコメントにかえさせていただきたいと思いま

す。今、安達さんのほうから、イギリスでのコミュニティ・インクルージョン的な取り組みについてのお話がありました。ここに、五十嵐先生がコメントされていた「マシな可視化」がどういうふうにかかわるのか、そしてそれを行っているのは一体どういった層の人なのかといった問いを対応させていくことで、これは塩原先生のコメントにもつながっていくポイントかなと思っています。



稲津 秀樹

それらの問いを敷衍して僕の話につなげるならば、今回、提起したお話は、フィールドワーク論だったので、むしろ私自身がかかわってきた他の事例をお伝えする中で、リプライさせていただければと思います。

私がよく知っているのは、自身が生まれた兵庫県神戸周辺の取り組みですが、そこでは「多文化共生」という形で、非常に熱心な活動が行われています。あるいは同様の取り組みは、私が育った神戸の郊外においてもなされています。そうしたところでは、ある種の他者の戦略的なパッケージ化みたいなことを行っているわけですね。つまり、エスニックな他者をマジョリティに全く見えないような形にしようのもよくないし、だからといって単純に商品

化してしまうのもよくない。

そうしたジレンマの中で、どういった形が戦略としてとれるか、と言われれば、やはりそこでは、アイデンティティが主流なパッケージ化の対象になるわけです。つまり、彼らがどういうふうな人間であるか、あるいは、エスニック的にどういったバックグラウンドを持った人間であるか、ということ啓蒙的に伝える取り組みです。そうした形のわかりやすいものが、祝祭なわけですね。つまり、多文化のお祭りです。安達さんがおっしゃられたように、多文化的な祭りを開くことによって、そこで表出された文化を通じて、この人はこういうふうな人間なのだ、という理解を行う場を地域でつくる取り組みです。こうした取り組みが、実際の地域イメージ形成にどうつながっているのか、という五十嵐先生が提起された論点も非常に興味深いものですが、その詳細はまた別の機会に譲るとして、今回の報告内容に即して言えば、私自身も、そうした場へのボランティアとしてかかわりながら、そこから当事者の生活により近いところにある日本語教室の取り組みにかかわっていったという経緯があったということです。そして参考資料として付した『社会学評論』に提出した拙稿（「日系ペルー人の『監視の経験』のリアリティ」）では、そこからさらに踏み込んだところで経験した話を元としています。

こうした過程を振り返ると、祝祭の場での他者理解に踏みとどまってしまうことに伴う問題もあるような気がしてくるのです。つまり、祝祭の場、「マシな可視化」の場での理解を、ベタな他者理解として受け取ってしまうと（私の発表中で「可視性の誤謬」と述べたように）他者を一面的に理解してしまうことになってしまいかねない恐れがあります。

あるいは、こうも問えるかと思います。そうした形の交流を楽しむことを、自身の価値観として「よし」としている層というのは、いったいどういった層に位置する人たちなのか、と。

それは例えば塩原先生が言ってくださったような、「越境者」の層に当たる人なのか、それとも「越境者」と「定住者」の区分が非常にあいまいな人のところなのか、それとも「越境者」、「定住者」の区分が意味をなさないところに位置する人なのか…。この点は、今後のこの領野における課題として非常に重要な提起だと思います。

仮に、これらに対応させて考えると、日本の「多文化共生」をめぐる状況として、やはり問い直さなければいけないのは、恐らく郊外に住んでいるような、あるいは都市周辺部に住んでいて、ミドルクラス的なところに位置する人たち（「越境者」と「定住者」の区分があいまいであるが故にその区分が意味をなす領域の住人たちが）が深くかかわっていることだと思います。私自身が参与している阪神間の現場からの仮説的な知見ではありますが、そうした現場には、郊外に住んでいたりと、あるいは職業が学校の先生だったり公務員だったりという方たちが割と携わっているという印象をもっています。

あるいは同様の現場にかかわる、移動する人びと／エスニシティに焦点を当てると、兵庫県でしたら、在日韓国・朝鮮人、コリアンの方が多いですね。そうしたいわゆる「当事者」の方も「マシな可視化」にかかわる現場にいらっしゃるにはいらっしゃるのですが、ある現場では、それこそ実行にかかわる外国人の方が少ないために、周囲の「日本人」たちから、お祭り活動の中心に彼らが「当事者」といったかたちで、それこそ「祭り上げられる」という現場を目にしたりすることがしばしばです。

このように「マシな可視化」の現場には、むしろ、そうした方々を取り巻く存在としてのミドルクラスの「日本人」が多数を占めている印象です。このように「多文化共生」という名目で、他者の「マシな可視化」を目指そうとするミドルクラスがいるとしたら、他ならぬ私自身も（調査以前の段階で）そういったポジション

にいたからこそ、移動する人びと／エスニシティにかかわる現場に入っていく「素地」があったのではないか、ということをお二人の先生方のコメントをお聞きして思っていました。

最後に、報告内容に引きつけてまとめると、現段階では、移動する人びと／エスニシティにかかわる「マシな可視化」の方法を構想する以前の段階において、調査者自身の立場性を踏まえつつ再帰的な調査を行っていくことで明らかにすべき点がまだまだあるのではないか。この点こそ、私自身が今回の報告で最もお伝えしたかったところです。その考察を深めた上で、五十嵐先生が言われた地域イメージの形成や、観光化に伴う次元での「マシな可視化」の方法を戦略的課題として模索していかなければならないと思われまふ。私からの、コメントに対するリプライとしては以上です。

#### ● リプライ4 谷村 要 ●

五十嵐先生、塩原先生、コメントありがとうございます。

「マシな可視化」というお題をいただいたわけなんですけれども、それについて一つエピソードを紹介できればと思います。五十嵐先生がおっしゃったように、私も研究者として、今回の発表でも「アニメ聖地」で起こっていることを、ある種、可視化する作業をしています。そのときに「いかにそれを語るか」はやはり悩むところがあります。私は、研究者として「アニメ聖地」へかかわっていますが、同時にオタク当事者としてもかかわっているところがあるので、オタクがどのように私の語りを受け取るかというところをどうしても意識せざるを得ないところがあります。

資料でお配りした新聞記事に、私のコメントが載っているんですけども、その一番下の段

のところに、「拒否されることの多い『オタク』を町民が受け入れてくれるかが鍵」と書いてあります。私自身は、正確にはこうは言ってなかったと記憶しているんですが、近いことを述べたのもまた確かです。



谷村 要

私は、これを「2ちゃんねる」のような掲示板で、どのような形でさらに語られるのかということに注目していたのですが、私の「拒否されることの多い『オタク』は」という箇所を、強調してコピペされるという状況が発生しているのをあるスレッドで目にしまして、「ああ、やっぱりそうきたか」とちょっと残念に思いました。

そこでは、「おまえらみたいな排除されているオタクのやつらを受け入れてくれる『アニメ聖地』はありがたい場所なんだ。だから、そのありがたい場所にお布施するのは当然だ」みたいな感じで、「アニメ聖地」が語られてもいます。「アニメ聖地」に関するネットの語りを見ると、そういう「語り」がかなりなされている印象をうけます。

去年フジテレビの東京ローカルで放送された番組で、「聖地巡礼者」のオタクたちが、鷲宮のお祭りにかかわり、地元住民とふれあう姿を映したドキュメンタリーがありました。このドキュメンタリーでは、地元住民から当初は戸惑いを持って見られていたオタクがやがて受け入

れられ、「アニメ聖地」の場において、やりがいやある種の救い——承認を得るというストーリー仕立てがなされています。

「やっぱりそうきたか」の「やっぱり」は、私の新聞紙上での「語り」が、このドキュメンタリーにあるような文脈に乗ったと思われたからです。

個人的には、そういう「語り」に収束するのではなく、また、ただ単にオタクを「お客さん」として見るのでもなくて、地域外からアニメ聖地という場所に来ている人がコミュニケーションを求めていることの意味を言いたかったところがありました。コンビニエンスストアや、あるいは、秋葉原のアニメグッズショップのチェーン店では、店員はマニュアル化された接客をするわけですが、すごく「ベタ」な話をすると、そこにはカネとモノのやりとりはあっても、「心」というか、そういう「何か」を交換する機会がほとんどない。人類学などでは、モノを交換する際、交換するモノに上乘せされている「何か」に着目しますが、それを現代の社会で取り戻す試みをしている場所として、私は郊外地域での「アニメ聖地」をとらえております。ゆえに、聖地巡礼をする人びとと地元住民との交流の重要性を、毎日新聞の記者さんにも強調したつもりだったんですが、結果は、オタクの特殊性を強調する言説を強化する方向にいつてしまいました。「マシな可視化」について言われたときにすぐ頭に思い浮かんできたことでこのことでもあります。

この「アニメ聖地」になっている場所は、どちらかというと、あまり特徴がない地域です。豊郷の場合であればヴォーリズの建築物がありました。これも結局は一時期、取り壊しをめぐった議論がされたように、価値のあるものとして少なくとも一部の地元住民には認識されていなかったような場所だったりします。また、鷲宮に関しましても、「関東最古の神社」という鷲宮神社があるとはいえ、鷲宮というまちの

特色に対して、アニメによるまちおこし以前に住民がどれだけ意識していたかということ、わからないところがあります。しかし、今ではそれらの場所に「聖地巡礼者」が集まり、私のような研究者がフィールドに入り、また、メディア上でさかんに語られることで、地元住民も「アニメ聖地」のまちとしての意識を持っている状況があります。

この中で、研究者はどのようにこの現象にかかわるのか。地元の商工会の方たちや聖地巡礼者らと話す中で得た知見を、「アニメ」によるまちおこしが別の地域で模倣されたり、その方法論が求められたりする中でどう語っていくべきなのか。今はその答えが出てこないんですけども、今後の課題として考えていきたいと思っています。

## ● リプライ5 轡田 竜蔵 ●

塩原さんが、スーパーエグゼクティブコア、ロウアーミドルクラス、ロウアークラス、サバルタンというふうに、上下のイメージで分けて、上が移動、「上方移動」のエネルギーが強い人で、下のほうが「負の移動」という、これはだれの概念なのかよく知りませんが、移動するエネルギーが低いと言ったほうがいいですかね、そういう図式を示されて、非常に興味深かったんですけども、その図式の中で、地元志向の若者というのが真ん中に位置づけられていました。

地元志向の若者は、一方で、一般的には移動するエネルギーがない人であるというような、そういう表象の仕方というのがあると思うんですね。社会的排除モデルですけども、山田昌弘さんなんかそういう言い方をされています。本当に活力が高い人は地元にとどまらず、チャンスを求めて移動していくはずだというような言い方があって、そういうなかでは移動す

るパワーが低い人だと見なされるわけです。しかしぎゃくに地元にあえて残るパワーがある、移動しないエネルギーがある人というような見方もあるわけです。同じ地元志向の若者であっても移動しないエネルギーがある人とそのエネルギーがない人みたいな、そういう異なった表象のしかたがあって、例えばあえてローカル・エリートになっていくような人というのは、NPO なんかで権力を持つことに命を燃やしたりして、それで非常に地元を牛耳るといふか、そういうところにパワーを使っていくというわけです。一方で、全くそういう地域おこしや地域づくりみたいなものに関心のない地元志向のあり方というものもある。



轡田 竜蔵

そういうふう考えた場合、私が報告の最後に言ったことなんですけれども、実は日本人の若者の地元志向と中国人の移動志向みたいなものが対比的に語られたりすることに対して一言言いたいのなんですけれども、例えば中国人の近年の留学ということに関しても、実は先ほどの「上方移動」と「負の移動」というものに分けて見ることができます。これに関しては従来、非常に階層上昇意識が強いというような側面が注目される傾向があったのですが、近年は中国も非常に高学歴化が進んできて、大卒就職が厳しい。いい大学に行けないから、とりあえずあんまり可能性ないけど、地元に住場所がなくなって、それで留学をするという選択がおこなわれてもいるわけです。これを「負の移動」と言えるのかもしれませんが、単に移動する人のほうが定住する人よりもパワーが強いみたいな、そういうイメージではなくて、例えば、地元志向の日本の若者と移住志向の中国人留学生にも共通する、そういう理論的なスキームというのが考えられるんじゃないかなと思っています。